



マッチレース、 選手層の拡大とユースの育成。 そして「アジア最強」を目指す!

日本ヨットマッチレース協会(JYMA)は、
その前身の日本ヨットマッチレース選手会(JYMC)が発足してから今年で14年を迎える。
その14年を振り返った。

マッチレースの普及と 現実のジレンマ

初の全日本選手権は1997年、蒲郡でヤマハ23を使用して行われた。参加選手数は8チームほどだったが。そもそもマッチレースは、他クラスと並行して行う選手が圧倒的に多い。また、1マッチで2チームしか戦えないという性質上、週末2日間のレースに出場できる選手の数はせいぜい10チーム。したがって、マッチレースの底辺を拡大して普及させたいという思いは強まるもの、参加選手数を増やすことは容易ではなく、初期のJYMAは常にこのジレンマに悩まされた。

ヒエラルキー構造の創造

そのような中、JYMAがいろいろなたちの協力を得ながら作り上げたのがマッチレースイベントのヒエラルキー構造だ。当初は年間4回程度の公式レースしかなく平坂なイベント構造だったが、葉山をベースとして日本セイルトレーニングの運営によるMRと呼ばれる裾野拡大のためのマッチレースイベントが作られ、マッチレースに1つの階層ができあがった。これは、国内のトップ選手を除くランキングの上位者が優先的に出場資格を持つもので、参加選手層を拡大するとともに、新たなマッチ参入者に対して、上位に入り込めるチャンスを与えることにも貢献した。

また、新西宮ヨットハーバーでも関西MRシリーズが開催されるようになり、新たな階層ができると同時に、地域的にも門戸が拡大された。さらには、各大会を全日本選手権の予選とすることで、全日本選手権

大会を最高峰の大会として位置づけられるようになった。

このように、入り口を拡大して入門者を増やし、初心者、中位層の技量を上げ、さらに上位者の技量も上げていくヒエラルキー構造ができあがった。五輪出場選手やナショナルチーム選手のマッチレースへの参戦は、このような努力が奏功し始めている証と言えよう。

視野を変えた門戸の拡大策

一方、別の視野からの門戸拡大を図っているのが、女子選手とユース選手の拡大である。幸いにも女子マッチはロンドン五輪の正式種目に採用されたが、国内女子マッチ選手を育成するのは簡単ではなく、苦戦を強いられている。そもそも選手の総数が少なく、さらに女子選手だけでチームを作る難しさが大きな負担になっている。そこでJYMAでは今年度は女子チームの概念を「女子選手を半数含むチーム」と定義し、女子選手の参入と育成を図ることとした。

他方、もう1つの課題がユース選手の育成だ。若手に限らず優秀な選手は必ずしかるべきクラスで活躍しており、忙しい練習やレースの合間を縫ってマッチレースへの参戦を促すこともまた簡単ではない。彼らをターゲットとするならば、シーズンオフの12月から2月を活用するなどのアイデアが必要となる。本年は1月末に東京・若洲でジュニアを対象としたOP級による「若洲マッチレース」を開催して好評を得たが、このようなオフシーズンの施策を拡大しつつ、ジュニア、ユース選手の育成を図ろうとしている。



英国マーク・リー選手を相手にYフラッグを揚げる吉田艇。(photo by Jenny Twine)

Collin Mullins International Youth Regatta 参戦記

西オーストラリア・パースのスワン川で行われた25歳以下のISAFグレード3のマッチレースで、隔年に開催される。使用艇はファンデーション36。

吉田工作と森田栄納介さんの2人が地元のユースセーラー4人と合流し、チームを編制。連日、10ノット後半から30ノットが吹き荒れたが、このボートは乗りやすく、ハンドリングにはまったく支障がなかった。

今回は10チームが参加し、スキッパーの平均年齢はおよそ21歳。私を含めて10代のセーラーも多くいた。

彼らのレーシングスタイルはアグレッシブで、攻めと守りのメリハリがはっきりしていた。それらは単純な人間性の違いから来るものではなく、彼らが何度もシミュレーションして得た多くの情報からの緻密な作戦であり、そのぶつかり合いが激しいマッチ生み出しているのだと肌で感じた。そして、彼らのマッチにはルールを知らない人が見ても興奮するほどにスリルがあると思った。

今回、苦労したのは日本とオーストラリアのアンパイアリングの違い。国内マッチで何度も議論されているボートストレッチでのジャイピングはすべてグリーンで、選手もまったく気にしていない。さらに、上下に関しては15条ではなく11条として扱われているケースが多かったように感じた。「マッチレースである以上、起こりうるケースをあらかじめ想定することができるため、急激な……というのは少し変わってくる」のだそう

だ。結果は、僅差で敗れることが多くあり残念だった。一番差を感じたのは、スタートラインまでの距離と時間の把握能力。

私がプレスタートにおいて重要視しているのは「ペナルティを取る」、「相手を追い出す」という点。しかし、海外の一流選手は、単純に「ジャストでスタートする」ということを重要視しているのに気づいた。私は距離と時間の把握が他選手よりも甘くなり、その結果、半艇身ビハインドでスタートしそのまま敗れてしまうケースが多かった。勝敗因はペナルティを取るか取られるかではなく、スタートが綺麗に決まるかどうかということだった。

不本意だったが、敗因が明確になったことで結果に悔しさはない。しかし、もっと早くからマッチに触れたかったと思った。若い、少しでもマッチレースに興味のある選手は、おそれることなく海外のレースに参加していただければと思います。

(吉田工作)



大きな経験をたんだ吉田工作選手

吉田工作選手の活躍と恵まれたユース環境

吉田工作選手の登場はマッチレース界にとってトピックスの1つとなった。ジュニア時代からセーリングセンスのよさは折り紙つき。昨年からは始まった関西MRのマッチレースイベントが追い風となり、吉田選手は一気に公式戦の舞台に上がった。ベテランや名人揃いの公式戦ではなかなか上位に入れないが、確実に腕は上げており、今年の1月末に豪州パースで開催されたコリンマリンスカップ(ユースマッチ)に駒を進めた。上位入賞はかなわなかったが、海外での貴重な経験は確実に今後の糧になるだろう(参戦記別掲)。また、その活躍が米国のインターナショナルアンパイアの目に止まり、7月に米国東海岸のロング

ビーチで開かれるガバナーズカップへの招待も手に入れた。かくもかようにチャンスはある。

彼の活躍とユースに与えられたチャンスの大きさに選手セーラーたちが気づき、多くの選手がユースマッチの世界に飛び込んでくることを大いに期待したい。

今年の目標はアジア最強!

最後に一言。

今年のJYMAの目標は「アジア最強」の地位の確保。具体的には11月の「アジア大会での金メダル獲得」である。アジアにおいて頭ひとつ抜け出した日本国内のマッチレースレベルの高さをアジア大会の場で知らしめ、それを糧にして、さらなる選手層の拡大と育成を図っていきたい。(公津浩平)